

## 僧侶になった君と

坂上翔馬

「お父さん、僕、お坊さんにならなければいけないの？」この問いかけに、一瞬、返す言葉が無かった。それは確か息子が大学1年生の時であった。

「今は、職業の選択は自由な時代だから、そんなことはないよ」というのが精一杯の返事であった。そして「僧侶はとても大切な職業であるが、中途半端な気持ちでは、とてもなれないし、よく考えたほうがいいよ」というような意味のことを言ったかもしれない。彼は「わかった」と小さいがはっきりと答えた。

彼が小学校6年生の夏、僧侶になるための最初の儀式である「得度式」が妻の実家の寺院で行われた。その時は、本人も家族を含めた周りの人たちも、彼が出家をするということについては、まだ半信半疑であった。

ことの成り行きは、こうである。妻の実家が四百数十年も続く寺院であり、代々住職を継承してきた。妻の祖父は小学校の校長先生をはじめ、家庭裁判所の調停委員なども含めて、地域に深く関わり、私自身も生前、その生き様に大変な尊敬の念を抱いていた。

通常であれば、妻の父が後を継ぎ、この寺の住職として務めるのが筋であったが、本人はサラリーマンの道を選び、定年退職後、少しの間、住職となったものの、暫くして病のため他界したのである。

妻は四姉妹の長女であり、他の3人も親の思いも届かず、それぞれ他家に嫁いでしまった。そういう訳で、義祖母と妻は、孫であり息子である私達の長男にある種の期待をしていた。

息子はそのような雰囲気を感じ、僧侶の道を真剣に考えるようになったのである。中学生から高校生、そして大学生へと成長していく間に、義父と義祖父の死に直面した。そして、大学の卒業式に出席できないまま、直ちに彼は永平寺に上山し、一年間の厳しい修行生活に入った。若い雲水の誕生である。

実は、当時、私自身は息子が仏門に帰依することには、大反対であった。それは考えてもみなかった未知の世界であり、私が全く経験していない分野に子供を出すということは、親として無責任であるという誇りを免れない。その上、協力できることが皆無という、とてつもない大きなハンディキャップには極めて苦しい思いがあったからである。

上山の朝、自宅の玄関先で「お父さん、行ってきます」と、すっかりきれいに剃り落

した頭で挨拶を受けた。「行つてらっしゃい」そして握手をしたが、もう顔を見る事が出来なかった。

そして彼はその足でお寺へ向かい、そこで皆の見送りを受け、永平寺へ旅立った。この時、雲水の出で立ちをした息子の後姿に、抑えきれなく妻は大声を出して涙を流したと聞く。私は、この光景を見なかったのが良かったのか、今でもよくわからない。

いよいよ、修行生活が始まった。最初の2ヶ月間は音信不通状態である。重い病気や事故などの非常時以外を除き、家族との電話や手紙のやり取りは厳禁である。この2ヶ月は、双方にとつて、とても長く、辛い日が続いた。

やつと息子からの便りが届いた。予想通り、食べることに寝ることに苦労している。これも最初に経験する大事な修行のひとつである。

2通目の手紙より、「1通目の手紙を書いている時ほどは、食べ物のことばかりを考えている時間は減りました。今は、食事の量は食べられるので、常に空腹なわけではないのですが、ただ栄養がないので脚気の初期症状でトイレが近いです。食事は落ち着いて食べれば充分な量で、味もおいしいのですが、ストレスの発散を他に向けることが出来なく、精神的に満足感を得ようと、ご飯を大量に食べてしまいます。今のところ、「食べる」と「寝る」ことが楽しみで、食事に代って辛くなってきたのが睡眠不足です。

特に朝の長い朝課(朝5時から)、2、3時間お経を読む日課のこと)の最中が一番眠く、気がつくとお経を唱えているつもりが、いつのまにか独り言になっていたりします。そろそろ上山後、2ヶ月経ち、着物の生活にも慣れ、なんとか着こなせるようになり、今では洋服より楽で気持ちいいと思うようになりました。見た目だけは一人前の坊さんになり、坐禅には慣れ、正座はまだちよつと痛いけど、お経は少しずつ覚え、日に日に坊さんらしくなっていく自分がいます。また、「食べる」と「寝る」ことの楽しみの他に、手紙を読むことも大切な楽しみのひとつです。家族3人からの温かい手紙、いつもトイレで読んでいるうちに涙があふれました。そして励まされました。送ってもらった手紙を支えにして、またこれから届く手紙を楽しみに、一日一日を生きていきます。」

私からの便り、(前略)「修行生活で、最初の1、2ヶ月は、体調の維持がとても大変だということをもつて体験している時期であることがよくわかります。これは修行の第一段階で、この間、各自が色々なことを考え、そして悩みながらも一日一日成長していくことで、次第に「軽い気持ち」というか、少しずつ「さとり」の心に近づいていくのではありませんか。日常の単純な生活でも毎日毎日、何か新しい発見があるはずで

す。それを大切にしてい、自分の「感性を磨く」ことが修行僧のつとめでもあります。毎日自分をなりに充実した日とするよう励んでください。」(後略)

妻からの便り、(前略)「あなたからの手紙を何度も読み返し、一言一言からその気持ちがよく伝わってきます。この前の手紙で「自分は誰なのか？」なんて文を見るとびっくりしてしまい、心配になってしまいます。なぜ？どうして？などと色々考えると矛盾だらけと思いますが、世の中すべてが矛盾なのです。(学校で難しい数学を勉強しても普通の生活には何の役にも立ちません。)あまり突き詰めて考えると哲学になってしまいます。先日、廊下を掃除している曹洞宗のポスターに「心をみがく」という標語が書いてありました。どうして？なぜ？などと考えて仕事をしていると、辛さも2倍になってしまふので、お山に在る間は、どうせしなくてはならないのなら何も考えず「無」になって一日一日を過ごしてください。同じ日々を過ごしていても、今の考えと何ヵ月後の考えでは、きっと違ってくると思います。それが精神の修行であり、体験した人だけが身につく心の宝ではないでしょうか。辛い時は大きく深呼吸を3回して、いつもあなたのことを心配している家族がいることを思い出してください。きっと心が落ち着くと思います。」(後略)

妹からの便り、(前略)「お兄ちゃんは、今大変な生活をしているのは分かっているのだけれど、もう一人新しい自分という人間をもてる機会ができたお兄ちゃんがある意味うらやましく思えたりもしちゃいます。普通の生活をしていては見えない事や、物に対する別の見方をすることが出来るような気がするし、あたり前だと思っていたことに對する感謝の気持ちをもつことができるのじゃないでしょうか？お兄ちゃんという人間がひとまわり大きくなった気が、この2回目の手紙で感じ取れました。これから先、辛さや苦しみもあると思うけど、物の見方を変え何でもプラスの方に向かっていくことを信じて、肩の力をぬいて耐えて欲しいと私は思います。」(後略)

修行僧とその家族との1年間に亘る往復書簡は、今では私達の大切な宝物となつてい。この間、新しい若い住職を待ち受ける準備として、客殿・庫裡の増改築プロジェクトに取り組んだ。地域社会に開かれたコミュニケーションの場としての役割を重視した、人と自然が共生する明るく暖かい雰囲気建築物を完成させることができた。

これからは、君たちの時代である。伝統を大切にしながらも、新しい寺院のあり方を研究して、多くの人々が平和で幸せに暮らすことができる明るい世紀を実現して欲しい。

平和な時代、癒しの時代、環境の時代、そして最も大切な「こころ豊かな時代」を君

たちが立派につくってくれることを期待している。そして再び君たちが「こころ豊かに  
生きた証」を、親から子へと確実に伝えてくれることを念願している。